

keyword's
column

社会的不利地域 【Socially Disadvantaged Area】

近年貧困の所在が都市へと移り、「貧困の都市化」と認識されるプロセスが注目を集めている。その中でも特定の地域への「社会的不利」の集中に焦点が当てられ、そのメカニズムによりもたらされる、社会的排除に対する地域のダイナミックな役割・効果に最も関心が集まっている。

特定の地域がもたらす、あるいは地域を通じて生じる様々な不利への対応は、排除に抗するために欠かすことのできない課題である。欧米では、地域が貧困や社会的排除に結び付く問題を同定するための指標の開発や、特定地域にフォーカスを当てた地域再生プログラムが実施されている。日本も昨今の経済不況の下、特定地域に集中して雇用・健康・教育等へのアクセシビリティが損なわれつつあることが報告されており、地元コミュニティを巻き込んだ、より包括的な地域再生プログラムの模索が喫緊の課題である。

都市研究プラザは、高齢化や人口減少、地域経済基盤の衰退等に苦しむ被差別部落やエスニックコミュニティ、そして簡宿密集地域（寄せ場）等を中心に、行政や支援団体、当事者組織とのパートナーシップの下、地域再生に向けた新たな実験に乗り出している。来年は東アジア都市の社会的不利地域の地域再生に向けたネットワーク構築にも帆を上げる予定である。

全 泓奎（都市研究プラザ准教授）

In recent years poverty has shifted its location to the cities and this process, which has been recognized as the 'urbanization of poverty,' is attracting attention. Within that topic, focus is being put on the concentration of the 'socially disadvantaged' in particular localities, and concern is centered most around the dynamic role and effect of the locality towards the social exclusion that is brought about through that mechanism.

In fighting against exclusion, the response to the various disadvantages that are caused by or come about through particular localities is an issue that cannot be overlooked. In Europe and America, indicators are being developed that can identify the problems where localities are connected with poverty and social exclusion, and area regeneration projects are being carried out that are focused on particular localities. In Japan as well, under the economic recession of recent years, it has been reported that the ongoing deterioration in accessibility to employment, health, education, etc. has been concentrated in particular localities, and trying to come up with more comprehensive area regeneration programs that involve the local community is a matter of urgency. In partnership with government, aid groups, and organizations of the people concerned, the Urban Research Plaza has embarked on new experiments leading to area regeneration, mainly centering on discriminated-against *buraku* and ethnic minority communities that are suffering from ageing and dwindling populations and the erosion of the local economic base, and neighborhoods where day-laborers' lodging houses are concentrated (*yoseba*). Next year we are planning to kick off the construction a network aimed at area regeneration for the socially disadvantaged areas of East Asian cities.

JEON, Hong Gyu (URP Associate Professor)

大阪市立大学都市研究プラザが編集母体となる国際学術誌 *City, Culture and Society (CCS)* が世界的学術出版社のエルゼビア社から創刊された。本誌は、年4回刊行される。60数名のボードメンバーには世界各国の著名な研究者が名を連ね、オックスフォード大学、ミシガン大学にも編集サブセンターを設置するなど、世界的な編集ネットワークを構築している。これは世界的にみても国際学術誌として優れた編集体制を持つものである。また、人文社会科学分野において日本の有力大学が単独で国際学術誌を編集するのは初めてであり、有力学術誌の単独編集を行っている大学は、ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学 (MIT)、シカゴ大学等の世界的な大学のみである。さらに、投稿は海外からのものが9割以上を占め、世界からの期待が非常に大きく、大阪市立大学の世界の学術界におけるプレゼンスが非常に高まるものと思われる。特に、都市研究分野の有力学術誌では、本誌が初めてアジアに編集拠点を置くとともに、全投稿数に占めるアジア諸国の研究者からの投稿数は約3割ある。本誌の創刊によってアジアが欧米からの情報の受容者から発信者へと変貌する変化の先駆けとなるものと思われる。

■CCSの目標

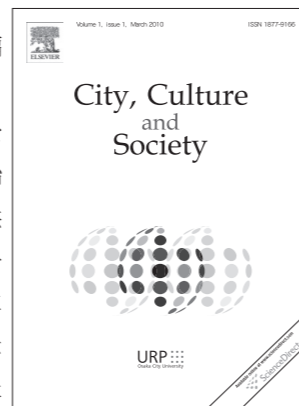
21世紀は「都市の世紀」と呼ばれ、創造都市、持続可能な都市、コンパクト・シティ、ポストモダン・シティ、メガシティなど、様々なコンセプトが生まれており、百家争鳴の感がある。また、経済学や社会学などの社会科学や文化論などの人文科学、さらには都市工学や建築学・環境科学などの自然科学など、あらゆる科学の分野において都市論が展開され、複数の学問領域にまたがる研究について、その必要性が叫ばれている。このような状況の中、CCSは世界の研究者に学際的議論をする環境を提供することを目指し、多様な学問領域に門戸を開いている。その中でも重要なトピックとして、都市経済、文化創造、社会包摂、社会的持続可能性、文化テクノロジー、都市マネジメント、持続可能な都市、創造都市などがあり、経済学、経営諸科学(経営・商学・会計)、プランニング、政治学、統計学、地理学、社会学、文化学、人口学、行政学などの学問領域を主な対象としつつ、これらを複合的・複眼的に俯瞰するものである。

また、CCSは、文化創造と社会的包摂を旗印とし、先端的な都市のガバナンスとマネジメントを中心テーマとして扱っており、都市に関する先駆的な研究を推進し、課題に対応する新たな都市づくりのためのビジョンを提示し、都市行政に資する役割を担っている。これは、CCSは理論と実務の架け

橋的役割を持ち、実務に埋め込まれた理論を掘り起こし、都市・文化・社会の相互関連の解明及びその結合と様々な市民知と学知の融合により、都市に新たなパラダイムシフトをもたらすことを目指しているからである。

■創刊号の紹介

創刊号には、佐々木雅幸編集長(都市研究プラザ所長)の「都市研究の新たな地平を切り拓く知的な探求の旅を始めよう」というメッセージに共感した世界の学術界で第一線の活躍をしている研究者によって優れた論文の投稿がなされた。創刊号で掲載された論文を簡単に紹介したい。



CCS 創刊号

Saskia Sassen氏(コロンビア大学教授)の*The city: Its return as a lens for social theory*では、広範な文献を引用して都市論における論争やパラダイムを概観し、都市論のパラダイムがヘゲモニー構造の分析から、都市再構築プロセスへの実証を通じて、新たなガバナンスの主体形成へと焦点が移っていくことを示唆している。

Andy C. Pratt氏(ロンドン大学キングスカレッジ教授)の*Creative cities: Tensions within and between social, cultural and economic development: A critical reading of the UK experience*では、英国における多くの事例をひもとき、都市政策のあり方を明示している。そこでは、文化・創造分野における根源的価値を認識し、学術・政策間のバランスを再構築することの重要性を示している。

Edmond Préteceille氏(パリ政治学院教授)の*The fragile urban situation of cultural producers in Paris*では、パリにおける文化生産者がその他の専門家、特に、民間企業に属する専門家と比べて、相対的に低所得で不安定な就業状況にあり、中産階級化のプロセスで地価が高騰すると都心から駆逐される傾向が高いことを示している。

中川真(都市研究プラザ兼任研究員/文学研究科教授)& 諏訪晃一(都市研究プラザ特別研究員/大阪大学大学院人間科学研究科助教)の*A cultural approach to recovery assistance following urban disasters*では、1995年に発生した阪神淡路大震災や2006年に発生したジャワ島中部地震の復興過程において、アートや文化が被災した市民やコミュニティ再生に果たす積極的な役割の分析を行い、

文化が持つコミュニケーションを形成する力により被災地でコミュニティ間が連結された実態を明らかにした。

Jean-Charles Chebat氏(HEC モントリオール教授)et al.の*Impact of culture on dissatisfied customers: An empirical study*では、多文化社会において活動するサービス産業は文化的要素に注意を払って行かなくてはならないという事実を実証分析によって見いだしている。本稿は、都市論におけるパラダイムシフトを背景に「創造性」や「文化」に着目した経営理論からの接近であるとも言える。

■今後の発刊予定について

第2号はRobert Tavernor氏(ロンドン大学LSE教授)をゲスト編集長に迎え、以下のようなロンドン特集が組まれる。

Robert Tavernor, et al.: *Visual consequences of the plan: Managing London's changing skyline*

Andy Pratt, et al.: *Tate Modern: pushing the limits of regeneration*

Jamie Keddie, et al.: *The market and the Plan: housing, urban renewal and socio-economic change in London*

Ian Richard Gordon, et al.: *London - planning the ungovernable city*

Juliet Patricia Davis Juliet Davis, et al.: *Assembling land towards an urban regeneration legacy of the 2012 London Olympics*

Suzanne Hall, et al.: *The Translocal Street: Shop signs and local multi-culture along the Walworth Road, south London*

また、第3号は水内俊雄(都市研究プラザ副所長)により社会的包摂に関する論考の特集が組まれる予定である。本特集では東アジアを対象とした研究者からの投稿がなされている。

さらに、第4号ではクリエイティブクラス理論で有名なRichard Florida氏(トロント大学教授)をゲスト編集長に迎えた特集が組まれる予定である。Florida氏の理論は創刊号において批判的検証が行われているが、あえてその当事者をゲスト編集長に迎えることにより、CCS誌上で論争が巻き起こり、学問の新たな潮流が生み出されることを期待している。

■都市研究プラザとCCSの使命

大阪市立大学都市研究プラザは「都市と市民に貢献する」大学としての使命を果たすためCCSで掲載された「学

知」を積極的に還元し、都市が向かうべき方向や採るべき政策指針を明らかにすることを目指してCCSの編集活動に注力していく。同時にアジアから新たな都市研究・理論が生み出される場としてCCSを整備していきたい。

■堀口朋亨(都市研究プラザ特任講師)

The first issue of the international academic journal *City, Culture and Society (CCS)* have published by the international academic publisher Elsevier with Osaka City University's Urban Research Plaza (Editor-in-Chief, Prof. Masayuki Sasaki, Managing Editor, Prof. Hiroshi Okano acting as the main editorial body). *CCS* will be published quarterly and mainly deals with urban governance and management under the banner of cultural creativity and social inclusion. The 21st century has been called the 'century of the city' and a variety of concepts have arisen. In a broad range of fields such as economics and sociology among the social sciences, cultural studies in the humanities, and in urban engineering, architecture, and environmental science among the natural sciences various urban theories are being developed, but the situation cries out the necessity for research that straddles a plurality of academic domains. *CCS* aims at providing an environment for interdisciplinary discussion among the world's researchers, through opening the doors on a variety of academic fields and through the blending of many kinds of citizens' knowledge and academic knowledge, also aims at bringing about a shift in the urban paradigm.

Moreover, with its central themes of groundbreaking urban governance and management, under the banner of cultural creativity and social inclusion, *CCS* plans to take on the role of bridging theory and practice, digging out the theory buried in actual practice, presenting a vision for a new kind of city building, and acting as a resource for urban governments.

2010年10月1日(金)から3日(日)、ブリュッセルで“4th Connecting Civil Societies of Asia and Europe Conference(CCS4)”が開催された(主催はアジア欧州財団・欧州アジア政策フォーラム。会場は国際会議場であるThe Square)。目的は、4日から同じ会場で開かれるアジア欧州首脳会合(ASEM8 Summit)に先立って市民レベルでの議論を行い、その成果を各国首脳に伝えて政策に反映させることである。ASEMは今回、菅首相と温家宝首相との緊急会談で話題になったが、そもそもはシンガポールの第2代首相を務めたゴー・チョク・トン氏の呼びかけで1996年から開かれ、アジアと欧州の関係強化のために、首脳だけでなく外務・経済などの閣僚級会合も継続開催されてきた。

CCS4は、アジアと欧州の相互理解のためには市民間の緊密な交流の促進が必要だとの観点から開催されるようになったものである。4回目となる今回はASEM8 Summitの公的な付帯事業として位置づけられており、全体会と7つのワークショップで構成され、35カ国約150人の参加者が集まった。ワークショップのテーマは、創造都市、教育保障、ヘルスケア、コミュニティの再構築などであった。

■充実したワークショップ

ワークショップのひとつ、“Sustainable Creative Cities: The Role of the Arts in Globalised Urban Contexts”は、アジア側から佐々木雅幸(都市研究プラザ所長)、欧州側からサシャ・カガン氏(ドイツ・リューネブルク大学研究員)がそれぞれオーガナイザーを務めた。そもそもの経緯は今年4月、主催者であるアジア欧州財団の事務局より依頼があったからだが、佐々木の提唱している創造都市論が注目されたことと、都市研究プラザの活動成果を海外に発信していることが要因だと言えよう。佐々木とカガン氏、そして事務局が推薦したタイ、フィリピン、シンガポール、イギリス、ドイツ、フランスなど各国から16人のアートマネージャー、アーティスト、研究者らが参加して、のべ7時間半の濃密な議論を行った。この中には、これまでアジア・アートマネジメント会議(※)に招いたメンバーも含まれており、たとえばフィリピンのアンゴノという町でコミュニティ・アートの活動をしているマリア・シルバナ・ザパンタ・ババテ氏も佐々木の推薦で参加した。

ワークショップはまず、佐々木が問題提起として自身の創造都市論、すなわち持続可能な創造都市のためには特定のエリート層だけに着目するのではなく、社会的弱者と呼ばれている人々の創造性を引き出して社会参加を促進するよう

な政策が求められていること、さらに文化的多様性と社会的包摂との関連を述べた。その後、カガン氏がファシリテーターとなって論点を整理しながら参加者からの意見を巧みに引き出していった。

印象的であったのは、参加者全員がある程度同じ方向をめぐしながらも、非常に小さな差異を聞き逃さず、積極的に意見を述べていたことである。互いの文化的背景を認め、けれど妥協せず、納得いくまで議論し続ける姿勢を誰もが持っていた。また、事前にメールなどでやりとりをして情報を共有していたことも、議論を深める上で不可欠な準備だったと考えられる。



ワークショップ3で問題提起する佐々木所長



提言を発表し、全員でディスカッション

2日間にわたる議論の末、右のような提言(Recommendation)をまとめたのだが、参加メンバー全員が納得いくような文章表現にたどりつくまでかなりの時間を要した。

たとえば、最終的には‘living well’という表現を用いているが、この‘well’は具体的にどのような状態を指すのかについて活発な議論が行われ、補完するための言葉が付け加わった。また、‘growth’も従来の経済的な概念とは対極に立つ

‘ecological growth’となるなど、最後の最後まで熱気あふれるディスカッションが展開された。

Recommendation

1. To meet the demands of living well together in the future, we recommend that the art of city making embrace ecological growth as social, environmental, cultural and economic diversity; and, governance as transparent forms of genuine, effective participation, dialogue and mutual learning. The arts can serve these processes as a dynamic catalyst and as a generator of imagination among all other disciplines. To this end, we recommend the creation of enabling environments for the development of larger numbers of smaller arts organizations/initiatives, which engage in participatory and trans-disciplinary processes directly responsive to the needs of diverse communities.
2. We call for intersectoral, transversal and sensitive approaches to urban development. Such approaches should allow indeterminate common spaces for shared use in our cities. We recommend ASEM governments to integrate the significant contributions of artwork and art-creating processes in urban development. We urge them to establish an enabling environment for the active involvement of artists and other creative practitioners in urban development policies, including determining the modalities of such participatory processes.
3. The arts have a relevant role to play in formal and informal education as well as in lifelong learning. Furthermore, we urge ASEM governments to actively consider looking beyond arts education towards a deeper role for art-in-education. Such an approach should include artistic ways of learning (such as experiential learning, question-based learning and non-linear problem-solving skills). We also recommend the inclusion of artists and other creative practitioners in consultative bodies on education policies.

■会議の成果と今後の展望

3日(日)の午後に全員が集まり、7つのワークショップそれぞれの提言が発表され、ここでも議論が行われた。別の専門家からの意見を聞くことによって提言内容をより深め、アジア欧州首脳会合へつなぐという目的を果たすためである。その後の成果については、しばらく行方を見守るしかない

が、こうした国際会議に「創造都市」がテーマに取り上げられることはおそらく初めてのことであり、今後も創造経済や創造産業などとともに重要なトピックとして取り上げられると思われる。

そして、これからの都市研究プラザの展開を考える上で、このCCS4で得られた議論の蓄積とネットワークの広がり大きな財産になるだろう。

※アジア・アートマネジメント会議：都市研究プラザが毎年主催している国際会議。アジア各国からアートのキュレーターやディレクターを招聘し、日本からもアートマネジメントの専門家や研究者らを招いて討論を行う。2007年3月に第1回目を開き、以降も毎年継続開催して2010年3月に4回目を開催した。

■川井田祥子(都市研究プラザ特任講師)

From October 1st (Fri.) through 3rd (Sun.) 2010, the “4th Connecting Civil Societies of Asia and Europe Conference (CCS4)” was held in Brussels (the organizers were the Asia-Europe Foundation and the Europe-Asia Policy Forum. The Square was the venue). Its goal was to hold discussions at the citizen level ahead of the Asia-Europe Summit Meeting (ASEM8 Summit) that would begin on the 4th at the same venue, convey the results to the leaders of the various countries, and have them reflected in policy. CCS4 consisted of a plenary session and seven workshops and it attracted approximately 150 people from 35 countries.

One of the workshops was “Sustainable Creative Cities: The Role of the Arts in Globalized Urban Contexts.” Serving as the organizers were, from the Asian side Sasaki Masayuki, Director of the Urban Research Plaza, and from the European side Sacha Kagan, Research Associate at Germany’s University of Lüneburg. 16 art managers, artists, and researchers from different countries participated and held intensive discussions. At the end of two days of discussion, they summarized the results into recommendations. These recommendations were then reported to the Asia-Europe Summit Conference.

The results of the discussions and the expanded network that came out of this CCS4 conference will provide a rich resource and material for thinking about the Urban Research Plaza’s future development.

豊崎プラザ南長屋改修プロジェクト

The Reform Project of *Minami Nagaya* in the Toyosaki Plaza

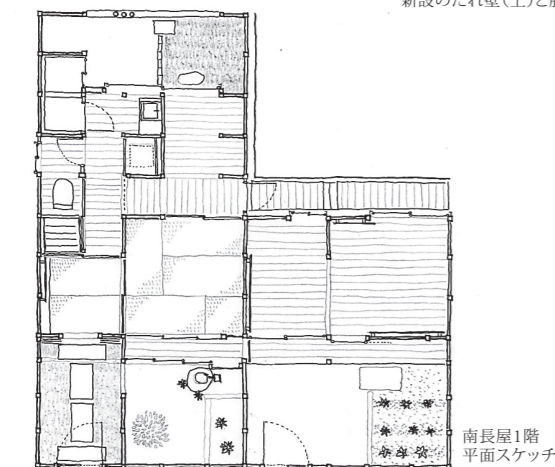
2009年冬から始まった豊崎プラザ南長屋改修プロジェクトが2010年春完成した。2007年から始まった豊崎での長屋改修プロジェクトの5例目となる。長屋改修プロジェクトは耐震補強と減築をテーマとして大阪の居住文化である賃貸長屋を現代の居住空間として蘇らせることを目的としている。南長屋においてもそれまでの長屋改修を踏襲しながら、新たに2戸の長屋をつなげて1戸にするなどの試みを行った。

まず現状調査を行ったところ、室内で最大210mmのレベル差が見られた。そのため土台からジャッキアップをしてレベル調整する必要があった。改修工事に際して、伝統的な木造建築物に適した構造計算を行った結果、以前と同じように土壁を増やしていくことで補強可能ということになった。

長屋はうなぎの寝床のように間口が狭く、奥行きが長い。このため、奥行き方向の壁量は足りるが間口方向の壁量が足りない。豊崎のそれぞれの長屋も間口は2間程度なので、その中に壁を増やしていくと、部屋と部屋とで行き来がしにくい小さな部屋ばかりになってしまう。これまで改修した4戸の長屋は延べ床面積が50㎡ほどと狭く、ひとつの部屋の広さも2畳や3畳、大きくても4.5畳である。それらの小間は襖や棧だけを残した建具で区切られ、場合によっては襖を開け放ち、部屋と部屋をつなげることで大きな部屋としても使うことができる。この南長屋でも耐震上有利であることを考慮し、小さな部屋をつなげ、間



新設のたれ壁(上)と腰壁(下)



南長屋1階
平面スケッチ

口方向にたれ壁や腰壁をはさみながら、大きな空間も確保できるような設計とした。

この長屋で初めて試みたのがキッチンに2階に設けたことである。2階は西に主屋の庭の緑が借景となっており、東にも開口部があることから、両方向から風と光が入り、とてもきもちのよい場所となった。またこの長屋は2戸をつなげたため、延べ床は80㎡程ある。1階をオフィス、2階を住宅として利用すること



キッチンのある部屋(2階)

とを想定したホームオフィスタイプの住宅であり、2階のキッチンのある部屋は屋久杉の古材の柱を拠り所としながら、一部天井を高くして空間に変化をつけることで落ち着いた居場所を作っている。また、減築した庭は新たに家庭菜園として使われ、プチトマトやゴーヤなどが育つ空間となっている。

このような2戸を1戸として再生することや一部を住宅以外に利用すること等の新しい試みは、都市の中で様々な機能が複合しながら持続可能な市街地を形成していくための手法として期待できる。

■竹原義二(G-COE研究協力者/生活科学研究科教授)
上原 充(豊崎プラザ研究補助スタッフ)

Toyosaki Plaza's *Minami Nagaya* Renovation Project which began in the winter of 2009 was completed in the spring of 2010. This is the fifth such *nagaya* renovation project in Toyosaki. The entire series of *nagaya* renovation projects, following the themes of seismic retrofitting and reducing construction, are meant to rehabilitate in accord with modern times the rental *nagaya* which represent Osaka's domestic residential culture. In the *Minami Nagaya* project, while following the already used means of renovation, a new approach was tried in connecting together two *nagaya* units to make one unit and making it possible to use the first floor as an office. Also it is characterized by a ground and structural plan that allows for making a larger space for the first floor, and improvements that enhance the domestic livability of the second floor, while still paying attention to earthquake resistance. It is hoped that these methods will help form a sustainable city by providing multifunctional residential housing.

豊崎プラザ

大阪らしい長屋と路地の再生実験

現場
プラザ
短信
1

豊崎プラザでの研究活動と学生の評価

豊崎プラザでは、2007年より、長屋路地アート等のイベントや研究会の開催、学生たちの教育機会の提供等を通じて大阪の居住文化を継承する創造的なまちづくりをめざした実践的研究活動を行っている。2009年より豊崎長屋での居住生活そのものを研究対象とした「木造長屋建築の保全・再生と持続的居住に関する実践的研究」を実施し、既存の長屋に長年お住まいの方たちや再生された長屋の若い居住者たちを対象に、現在の住まい方・暮らし方や、ライフストーリーにまで及ぶきめ細かなインタビュー調査を実施し、長屋住まいの特徴や長屋再生プロジェクトに対する評価等を行った(Newsletter Issue7参照)。

その一環として、長屋再生プロジェクトに関った大学生37人に対するアンケート調査を実施した。それによると、当初、学生の3割弱が豊崎プラザに対し、「寂れている」「古い・汚い」等の印象を持っていたが、現在はほとんどが「風情・趣がある」や「歴史的価値がある」と回答している。また、長屋再生プロジェクトに参加して学んだこととしては、「季節や環境について関心が高くなった」「生活や機能を空間として表現するデザインへの理解が深まった」「共同で作業を進めていくことの重要性を認識した」等とする回答が8割程度を占めている。

このように、豊崎プラザでの長屋再生プロジェクトを通じて、大阪の居住文化を継承する意識と力を持った次世代が続々と生まれつつある。

■上原充(豊崎プラザ研究補助スタッフ)

梅田に近い都心にあり、大正年間に建設された主屋と長屋建の貸家群、路地が残る一郭です。オーナーと大学が共同して、老朽化した木造住宅の耐震設計、快適な住生活、住宅経営、居住環境の整備を柱に、都市住宅としての長屋の再生モデルを目指し、居住文化の継承や市民の生涯学習なども含めて、創造的なまちづくりを進めています。

和泉プラザ

「地域の歴史的総合調査」の取り組み

現場
プラザ
短信
2

2010年度和泉市合同調査 ー和泉市富秋町ー

和泉市の平野部に位置する富秋町を対象に、2010年9月28日(火)～30日(木)に和泉市合同調査を実施した。参加者は58名で5つの班に分かれ、富秋中学校・富秋町公民館を会場とし、地元町会の協力を得て多様な調査活動を行った。

史料調査では、近代行政村信太村の随一の地主である奥野徳太郎家に伝来した富秋町・奥野紀代子氏所蔵史料を中心に、戦前期における信太村役場文書もあわせて調査した。また、町会運営、農業・水利、だんじりなどのテーマを立て、それぞれ地元住民からの聞き取り調査を行った。

聞き取りによって、大野池や千草池を利用した水利のあり方が詳細に復元された。しかしその一方で、かつて行われた村入りを意味する「名付け」の儀式や「千度講」はすでに地元の方々の記憶から遠のいており、こうした側面からも、高度成長期以降の宅地開発・道路開発の影響を大きく受けた富秋の現状を把握することができた。

最終日には富秋中学校において、3日間の各班の成果を共有する調査報告会を開いた。来年5月に刊行する『市大日本史』14号に、本調査の報告書を掲載する予定である。

■久角健二(和泉プラザ研究補助スタッフ)

大阪市立大学日本史研究室と和泉市教育委員会と、毎年夏に実施する和泉市合同調査を、主要な活動として位置づけています。毎年、和泉市内の1つの町会を対象に、地域の歴史を多様な方法から総合的に調査し、地元住民とともに地域の生活構築の歴史を学んでいます。



富秋町のだんじりを見せてもらう

クリエイティブセンター阿波座

クリエイティブな都市型産業の連携推進と政策研究の拠点

現場
プラザ
短信
3

ゼロから始める電子出版人材育成

創造産業における新たな人材育成モデルづくりの支援のため、10月から翌1月まで本センターを構えるACDCビルのホールにて開催中の「ゼロベースから始める電子出版・アプリ開発プロデュース」の現場協力を行っています。同事業は、近畿経済産業局が主催、扇町プラザ以来の連携団体である大阪市の外郭機関メビック扇町が企画協力を行っているもので、携帯端末やスマートフォンの世界的な普及に伴って起こりつつあるコンテンツ流通の革命である電子出版への参入を関西のクリエイターが実現することを目的とした講習事業です。

今までの東京一極集中による書籍取次網やコンテンツマーケティングにとらわれることなく、クリエイター自身が直接、電子空間上で情報流通を行える電子出版。一方で、急速な電子出版市場の形成において、関西には十分な情報とノウハウが行き渡らず、そのことがクリエイターにとっての電子出版に向けたチャンスを掴みにくいものになっています。

同講座は、いち早くチャンスを掴んだ関西第一人者のアプリ製作者や電子出版業界全般に明るいプロデューサーを講師に迎え、クリエイターが持つWEB製作やDTP等現在の技能の延長にある電子出版の製作手法、電子市場への送り込み策をまさに「ゼロベース」から始める講習ですが、1月には受講者による電子出版コンテンツの実現と世界への配布までを行います。

■岡田智博(クリエイティブセンター阿波座研究補助スタッフ)



講習の様子

2U

大阪／ハンブルク リノベーション・ワークショップ

Osaka-Hamburg Renovation Workshop

2010年8月24日(火)、大阪市立大学文化交流センターにて、「大阪／ハンブルク リノベーション・ワークショップ」が開催された。主催は都市問題研究「く住みごたえのある町」をつくるー大阪・ハンブルクにおける市民文化に基づくエリアマネジメント(研究代表者:大場茂明文学研究科教授)、共催は船場アートカフェである。本ワークショップの趣旨は、ハンブルクと大阪においてリノベーションやコンバージョンなどの手法を活用しつつ、地域に根ざした街作り活動を展開している組織や個人に集まってもらい、それぞれの活動の紹介と意見交換を通じて、地域に根ざした都市更新の可能性について議論することである。

ワークショップは3部構成になっており、まず第1部では海老根剛(文学研究科准教授)が、ハンブルクで民間企業として地域に根ざした都市更新プロジェクトを多数手がけているシュテーク(steg)の紹介を行い、その具体的な仕事を紹介するビデオを上映した。なおこのビデオは、ウェブ上で公開されている。

(URL: <http://www.vimeo.com/14632834>)

続く第2部では、大阪とハンブルクのパネリストが、それぞれ自分たちの活動に関するプレゼンを行った。大阪側からは、千島土地代表取締役の芝川能一氏、アートアンドクラフト代表の建築家中谷ノボル氏、そして、URサポート都市再生企画部長の久坂斗了氏が、発表を行った。ハンブルク側からはシュテーク代表のハンス・ヨアヒム・レスナー氏が登壇し、ハンブルクにおけるシュテークの多面的な活動とその背景にある考え方について報告した。

第3部では、嘉名光市(工学研究科准教授)の司会のもと、上記パネリスト4名にシュテークの不動産部門責任者クルト・ラインケン氏を加え、ディスカッションが行われた。

ここでは、それぞれの都市の制度的環境の違いを確認し

つつ、地域に根ざした都市更新の手法と理念について、活発な議論が交わされた。グローバルに活躍する建築家やプランナーとは異なり、遠く離れた都市で地域に根ざした活動をするアクターが直接対話する機会は稀であり、その意味で、非常に貴重かつ有益なワークショップとなった。



ディスカッションの様子

■海老根剛(文学研究科准教授/船場アートカフェ・ディレクター)

This workshop was held on August 24, 2010. Two guests, Hans Joachim Rösner and Kurt Reinken, from the private firm of Steg, which is developing unique urban renewal projects that have sprung up from local communities in Hamburg, were invited to come.

They met together with individuals and organizations who are developing town activities rooted in local communities in Osaka and using such means as renovation and conversion, and they discussed the methods and the possibilities of urban renewal that springs from the local community.

船場アートカフェ

芸術によるコミュニティ再構築

芸術がもつ「接合/媒介する力」に焦点をあて、都市における芸術の可能性を追求しています。大阪固有の文化資産に着目しつつ、芸術を介して人と人をつなぐ新しいコミュニケーションの場を創造する試みを展開します。

インドネシア芸術大学ガムランコンサート

2010年9月18日(土)、河内長野市のラプリーホールで「インドネシア芸術大学+マルガサリ ガムランコンサート」(都市研究プラザ共催)が開催されました。インドネシア屈指の芸術大学であるインドネシア芸術大学ジョグジャカルタ校から教員や学生など総勢22名が来日し、中川真(都市研究プラザ兼任研究員/文学研究科教授/船場アートカフェプロデューサー)が主宰するガムラン合奏団「マルガサリ」と共演しました。

ガムランとは、インドネシアの青銅製の楽器や鉄琴などの合奏音楽のこと。生活に根ざした民族音楽として、古くから人々に親しまれています。今回の公演では、ジャワ文化の中心地であるジョグジャカルタの宮廷舞踊や大衆の音楽などが披露されました。舞踊と器楽合奏を織り交ぜた多彩なプログラムを通して、猛暑の続く大阪にガムランの涼しげな音が響きました。

ジョグジャカルタは、2006年のジャワ島中部地震によって深刻な被害を受けました。ガムランもその例外ではありません。芸術大学では校舎の半分近くが倒壊し、たくさんの楽器が瓦礫の下敷きとなりました。文化創造ユニットはこれまで任意団体「ガムランエイド」の活動を通じて、震災の文化復興支援に取り組んできました。ジョグジャカルタの人々との継続的な交流が生み出した今回の公演は、震災被害に屈しない音楽芸術の力強さを伝えるものです。芸術を介して人と人がつながり、新しい文化が創造されていく可能性を感じさせる公演となりました。

■石川 優(船場アートカフェRA)

現場プラザ短信4

4U

第7回 CCSワークショップ

Urban Controversies and the Making of the Social
都市の議論と社会性の形成



Dr. Albena Yaneva

2010年8月24日(火)、講師にアルベナ・ヤネバ博士(Dr. Albena Yaneva)を迎え、第7回CCSワークショップ“Urban Controversies and the Making of the Social”が開催された。ヤネバ博士は、マンチェスター大学のシニア・レクチャーで、専門は社会学および認知人類学であり、高名なブルーノ・ラトゥール教授の教えを受け、博士号を得ている。

ヤネバ博士は、ニューヨークのホイットニー美術館拡張プロジェクトにおけるレム・コールハースの事例について報告を行った。60年代に建設されたホイットニー美術館は増え続けるコレクションのために拡張が必要となった。しかし、近隣地域の反対もあり実現をみなかった。その後、2001~04年の間にオランダの建築家、コールハースが新棟のデザインを行い、ヤネバ博士はそのチームの研究を行った。

コールハースは、民主主義の表(Table of democracy)を使用してプロジェクトを実施しようとした。表はヒューマン・アクター(建物の利用者、通行人など)、ノンヒューマン・アクター(周りの建物、歴史、重力、地理)の様々なグループの声を含み、議論マッピングに使用できるようになっている。建築物は完成品ではなく、作られ続ける。何かを表現するだけでなく、何か行為をするものとなるのだ。ようやく、コールハースは様々な声の一つにすることに成功し、歴史的なコンテキストを取扱い、美術館のキュレーターのビジョンを融合した建物を設計した。しかし、ホイットニー美術館の評議員会は、2004年に膨大な建築コストを理由にコールハースの提案を却下したが、ワークショップでは、金銭面以外の他の理由についても活発な議論が交わされた。

ヤネバ博士は、議論マッピング・プロジェクトについても触れた。議論マッピングは、「議論の分析」を意味するとともに、建築学的知識、建物、都市概念を生み出していく継続段階の記述が可能になる研究も含む。詳しい情報は、以下のURLを参照のこと。

www.mappingcontroversies.co.uk

■ハンヌ・クレンサアリ(G-COE特別研究員)

In the CCS Workshop, Dr. Albena Yaneva from Manchester University presented her research on Rem Koolhaas, the Dutch architect, when he was working on the enlargement project of the Whitney museum. She elaborated how various actors, human and non-human actors, act in making architecture.

海外サブセンター便り
from Oxford

URP Oxford sub-center

オックスフォード・サブセンター

The Oxford sub-center resides at the Saïd Business School of the University of Oxford. It plays a key role in developing research agenda, authorship and readership of *City, Culture and Society (CCS)*, and in organising seminars and conferences. At the early stage of the CCS project, the Oxford sub-center was the main mediator between the Urban Research Plaza and 'Elsevier' - internationally renowned publisher in Oxford - from which CCS came to be published. Currently, Ms. Miwa Nishino of Oxford University and I engage ourselves in developing actively the authorship and readership for CCS which is essential for the future of our international journal. Drawing upon the originally created list of researchers all over the world, new networks, research agenda and papers started being developed. Staff of the Oxford sub-center also handles major part of the review and editorial process for papers which are submitted to CCS. In the future, they wish to organise major conferences which aim to mediate researchers in Europe and the Urban Research Plaza.

■Tomo Suzuki (オックスフォード大学教授)



オックスフォード大学のキャンパス

オックスフォード・サブセンターは、オックスフォード大学のサイド・ビジネス・スクールにあり、英文ジャーナル「City, Culture & Society」(CCS)の研究議題、著作者、読者の拡充に重要な役割を果たし、セミナーや会議なども開催する。CCSプロジェクトの初期には、都市研究プラザとオックスフォードで国際的に有名な出版社でありCCSを出版するエルゼビア社を仲介した。現在、オックスフォード大学の西野氏と私は国際的学術誌CCSの将来の本質的要素である著作者や読者の開発に積極的に取り組み、世界中の研究者や新しいネットワーク、研究議題や文書のリストを新たに作成し、活用している。また、当サブセンターのスタッフは、CCSに投稿される論文の審査や編集業務の主要な役割を担う。将来は、ヨーロッパの研究者と都市研究プラザの研究者が一堂に会す主要な会議を開催したい。

3U

台北サブセンター開設と台北市萬華区の地域再興に関する現状調査

Opening of the Taipei Sub-center and survey of present conditions related to local renewal in the Wanhua District of Taipei

2010年9月2日(木)から4日(土)にかけてURP台北サブセンター開設に伴う調印式と今年度のホームレス支援のシンポジウム開催にむけた協議のため台湾大学、台北市政府社会局、勞工局などを訪問した。台北におけるホームレス支援や社会救助業務の現状と日本や韓国との情報交換を行った。また、アウトリーチ業務への同行や平価住宅(福祉住宅)や国民住宅コミュニティ活動のフィールドワークを現地ソーシャルワーカーと行った。

9月3日(金)国立台湾大学社会福祉学部において台北サブセンター開設に伴う調印を行った。国立台湾大学社会福祉学部鄭麗珍教授、黄麗玲建築都市計画学部助理教授、楊運生台北ホームレス支援ネットワーク事務局長、日本側からは水内俊雄(都市研究プラザ副所長)、全泓奎(都市研究プラザ准教授)、中山徹氏(大阪府立大学教授)同席のもと本年度実施予定のシンポジウムにむけた協議が進められ、台北サブセンターの正式発足に至った。また、3月に東アジア各国のサブセンターとのシンポジウム実施に向けた協議を行った。



台湾大学における調印式

台北市萬華区にある勞工局就業服務中心(就労支援センター)を訪問。センターの邱仁兆氏の説明により2009年より現在の場所に移転したセンターの説明を受けた。このセンターには簡易宿泊施設やシャワールームなどが設置されているが、周辺住民との関係などで施設の利用は現在、休止中であった。社会局のワーカーと勞工局のワーカーが協力して野宿生活者へのアウトリーチが行われている、組織の横断的な連携もみられた。

台北市社会局 萬華区社会福利服務中心(デイセンター)を訪問。訪問時にはホームレスの人たちを含む多くの相談者がセンター窓口で順番待ちをしている状態であった。生活困窮者への相談機能が果たされていることが感じられた。また、センター利用者の中には、本年春より発刊したビッグイシュー台湾版の販売をして収入向上を図っている人もいた。特にこのセンターは、ビッグイシューの受け渡し窓口機能も持っているため多くの層に対するサービス提供が実施され

ている状況がみられた。台北市の概要や現状の報告もしていただき、現状認識や日本、韓国の情報交換なども行った。野宿生活者から低家賃で共同生活の住宅に入居した当事者への訪問も行い、センターのワーカーがどのように生活困窮者に対してサポートを行っているかなどの状況も現場フィールドワークを通して感じられた。夜間には、通常アウトリーチ相談を行っている現場(地下鉄龍山寺駅近くの公園)への案内もいただき、当事者とのコミュニケーションの状態も把握できた。社会局のワーカーの丁寧な相談活動を垣間見た。

9月4日(土)には、1961年に建設された国民住宅と、社会局の管轄する平価住宅を訪問した。萬華区南機場国民住宅では、忠勤里長(自治会長)方荷生氏の聞き取り調査を実施した。高齢者への独自サービスや緊急通報システム、地域高齢者健康相談、配食サービス、小規模チャレンジショップ、カラオケ集會の実施など地域コミュニティ活動の説明や老朽化した住宅の問題など多くの聞き取りを行った。台湾でも日本同様コミュニティ再生の課題や、高齢化社会に対応した地域づくりの先進事例を視察させていただいた。またビッグイシュー台湾の編集者との懇談もおこなった。



南機場国民住宅の外観と忠勤里のコミュニティセンター

■池谷啓介(都市研究プラザ特別研究員)

From September 2nd (Thurs.) through 4th (Sat.) 2010, we visited the Social Welfare Dept. and Architecture and City Planning Dept. of National Taiwan University, the Taipei City Social Affairs Bureau and Labor Bureau for signing ceremonies in connection with the opening of the URP Taipei Sub-center and to solicit cooperation for the upcoming staging of this year's symposium on aid for the homeless. We exchanged information on current conditions in aid for the homeless and social assistance work in Taipei and in Japan and South Korea as well. We also engaged in outreach work and field work among communities in welfare housing and public housing together with local social workers and volunteers.

西成プラザ 生活困難支援の老舗西成での実践を世界発信

現場プラザ短信5

多文化福祉に基づいたコリアンコミュニティの地域再生に関するワークショップ

2010年9月18日(土)、高原記念館にて、こりあんコミュニティ研究会第17回定例研究会「多文化福祉に基づいたコリアンコミュニティの地域再生に関するワークショップ」が開催された(後援:日本居住福祉学会、財団法人ヒューマンライツ教育財団、財団法人住宅総合研究財団、大阪市立大学都市研究プラザ)。本会は、こりあんコミュニティ研究会のメンバーが中心となって2009年から行なってきた、和歌山県下と西成区における在日コリアンコミュニティ調査の中間報告をベースにして、両地区に加え、生野や東九条、ウトロといった関西各地の在日コリアン集住地区でコミュニティ活動を実践されている方々から、それぞれの地域の実態と取り組みについて報告がなされた。各地区の状況を並列させることで、相対的な視点が生み出され、コリアンコミュニティの共通の課題や地区間の違いを認識できる機会になった。その後、ワークショップという形で報告者とシンポジウム参加者全員が円座となり、それぞれが発言する場を設けた。ここでは、高齢者福祉などコリアンコミュニティが直面する課題への対処として世代間および周囲の地域との「つながり」の構築の仕方に議論が及び、多様な記憶の記録化や質問紙による実態調査だけではなく、地域間の連携促進や情報の共有化など、本研究会が今後行なうべき課題も明確となった(参加者38名)。西成プラザでは、従来、あいりん地域や旧同和地区の北西地区中心に、もうひとつのまちづくりの実践、助言を行ってきた。今回のコリアン集住地区への調査は、多様で重層化した社会的条件不利な地域へのプラザの参入に、新たな実践を加えたと言える。

釜ヶ崎をはじめとする西成区北部には、社会的に有利でない状況が蓄積しています。釜ヶ崎の一角に集会・研修のスペースを持つ本プラザは、多くの公的組織、NPOと連携し、地域の諸活動に関わりながら、都市問題の本質を社会に伝える、実践的な研究ネットワークから構成されています。

■本岡拓哉(都市研究プラザ特別研究員)

大淀プラザ ホームレス支援から地域のネットワーク/人材の創造

現場プラザ短信6

おおよど縁パワーネット

おおよど縁パワーネットは2010年4月に大阪市北区(旧大淀区)の豊崎東小学校区において、連合振興町会、社会福祉協議会、ネットワーク委員会、はぐくみネット、更生施設大淀寮などの地域内の諸組織と連携しながら既存の制度では拾いきれない地域支援を実施し、自らがコミュニティ内外のネットワークの結節点となることを目的として立ち上げた団体です。主に大淀プラザに關係する都市研究プラザスタッフ数名が設立当初からアドバイザー・実行部隊として関わっています。

現在、おおよど縁パワーネットでは①地域生活支援アドバイザー事業、②天神橋アートセンター事業の2つの事業を中心として活動を進めています。①は既存制度の隙間を埋める住民ニーズに合わせた支援を地域に提供し、また、数名の事業の被雇用者が現場経験を積むことで地域とのネットワークを作りながら社会的スキルを習得し、最終的には地域の問題発見・解決とネットワークづくりを担うことで地域を支える「地域生活支援アドバイザー」を輩出することを目指す事業です。②はこの団体の事務局である銭湯跡を「天神橋アートセンター」として一般利用に開放する事業です。銭湯跡の独特の空間にひかれてなのか、特に大阪内外で活躍する若手アーティストを中心として多くの利用があります。

現在は、団体立ち上げから数カ月が経過し、徐々に地域内外のネットワークの結節点となりつつある段階です。地域内外の諸組織と取り組む創発的な社会的ビジネス・コミュニティビジネスのモデルケースとして、さらなる展開が期待されます。

旧大淀区天七に立地し、近接して更生施設や一時保護所、ホームレス自立支援センターの大阪市の日雇、ホームレス支援施設があります。元銭湯を利用した本プラザは、ホームレス現象のオブザーバトリ(観測所)として後方支援にあたり、同時に広い空間を利用した、アートによる地域ネットワーク創造、人材創出の拠点をめざしています。



天神橋アートセンター入口

■中村 拓(大淀プラザ研究補助スタッフ)

阿倍野プラザ 近代長屋を活用した居住福祉支援の試み

現場プラザ短信7

アベノ思ひ出アルバムと活動写真



活動写真の上映風景

2010年8月25日(水)、都市研究プラザ阿倍野プラザの協賛で、阿倍野区阪南町の有形登録文化財「寺西家」にて 無声映画会が行なわれた。

弁士は小崎泰嗣氏。燕尾服に身を包み、骨董店で収集したフィルムを当時の映写機を使い、蓄音機でSPレコードをかけるという珍しいスタイルで上映された。プログラムは、チャンバラの他「一寸法師」のアニメ等もあり、昭和初期の雰囲気も存分に味わえた。

上映の前には、水内俊雄(都市研究プラザ副所長/文学研究科教授)の「アベノ思ひ出アルバム」の講演も行なわれた。これは毎年「昭和の日」にあわせて開かれる地域活性化イベント「どっぷり昭和町」の際に地域住民から寄せられた貴重な写真数点と、古地図を組み合わせた資料を使用したものである。阿倍野区が昭和初期の土地区画整理事業によって「大大阪」の好適な住宅地として発展してきた形成過程を、改めて市民とともに辿るものとなった。

■川浪 剛(阿倍野プラザ研究補助スタッフ)

URP GCOE DOCUMENTのご案内

都市研究プラザは、2006年4月に誕生以降、世界的な都市研究者や政策家を招いた国際シンポジウムやワークショップを開催し、国際的な都市研究と都市政策のネットワークを構築、新しい都市研究の姿を模索してきました。

2007年6月にグローバルCOE拠点に採択されて以降、そのプログラムのテーマである「文化創造と社会包摂に向けた都市の再構築」に関わる様々な国際的な研究活動や交流を広げてきています。

そうした研究成果や活動記録は、グローバルCOEの成果として、ドキュメントやワーキングペーパー、レポートそしてこのニューズレター等にまとめられ、一部は都市研究プラザのウェブサイトから閲覧することができます。

このうち、公式の刊行物となっているドキュメントについて、このたび、URP GCOE DOCUMENTとして、第1号から第7号まで、水曜社から出版され、2009年8月に出版された「創造都市と社会包摂」とともに、全国の書店やインターネットサイト(amazon等)を通じて販売されるようになりました。

なお、今後も研究活動の展開とともにURP GCOE DOCUMENTの続刊が予定されています。

詳しくは、以下をご覧ください。

<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/archives/documents.html>

URP GCOE DOCUMENT

1～7号まで発売中 ※以後続刊 A4判並製/定価各2,835円



第1号 創造都市のためのアートマネジメント
アジア・アートマネジメント会議 1

第2号 船場アートカフェ
2006年1月～2008年3月

第3号 世界創造都市フォーラム2007

第4号 都市再生と創造性

第5号 社会的接点としてのアートマネジメント
アジア・アートマネジメント会議 2

第6号 記憶と地域をつなぐアートプロジェクト
こころのたねとして 釜ヶ崎 2008

第7号 Managing Sustainability and Creativity
Urban Management in Europe and Japan

水曜社 東京都新宿区新宿1-14-12
URL: www.bookdom.net/suiyosha/
E-mail: sato@bookdom.net
Tel: 03-3351-8768

イベント・研究会の予定

各詳細は、都市研究プラザホームページをご覧ください。

11/1 ～5	まちのコモンズ2010 第5回船場建築祭 …船場界限	第2ユニット
11/11 ～12	国際ワークショップ“Traceable Cities” …マンチェスター大学	第4ユニット
11/20 ～21	第2回日韓社会的企業セミナー …大阪市立大学他	第3ユニット
12/1	第11回阿倍野Religion-Cafe …阿倍野プラザ	第3ユニット
12/4	第271回人文地理学会例会 …西成プラザ	第3ユニット
12/15 ～17	第1回国際ラウンドテーブル会議「都市の世紀を拓く」 国際シンポジウム「文化創造と社会包摂による都市の再興」 …大阪国際交流センター	
12/15	セッション1 基調講演「文化創造と社会的包摂による都市の再興を語る」 シャロン・ズーキン(ニューヨーク市立大学教授) リリー・コン(シンガポール国立大学副学長) 町村敬志(一橋大学教授)	
	セッション2 招待講演「新国際ジャーナルによる大阪からの発信」	
12/16	セッション3 専門家会議 “Rethinking Urban Creativity”	
	セッション4 専門家会議 “Networking the Asian Urban Studies”	
12/17	セッション5 専門家会議 “Presentations by URP Research Fellows”	
	セッション6 専門家会議 “Perspectives of the AUC and its Prospects”	

■特別研究員(若手)公募

G-COE特別研究員(若手)募集(平成23年2月募集分) 2011年1月に公表を予定しています。

情報⇒ <http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/about/recruit.html>

■URP-Newsletter 次号発行予定は、2011年2月です。

URP

Osaka City University | Urban Research Plaza
大阪市立大学 | 都市研究プラザ

「都市研究プラザ」は、2006年4月に誕生しました。日本最大の公立大学として、これまでも都市の研究に注力し、実績をあげてきた大阪市立大学が、都市再生へのチャレンジとして立ち上げた全く新しいタイプの研究施設です。「プラザ」という名前が示すように、「都市」をテーマとする人々が出会い、集まる広場をめざしています。大阪や周辺都市、さらに海外の都市に小さいサテライト施設(現場プラザ、海外サブセンター)を設け、教員・院生スタッフが現場や海外に出て研究やまちづくり活動を行っています。また、「プラザ」は、世界第一線の都市研究者・政策家と国際的なネットワークをつくり、国際シンポジウムやワークショップを開催しています。2007-11年度グローバルCOE拠点に採択され、「文化創造と社会包摂に向けた都市の再構築」をテーマに多彩な研究プロジェクトを展開しています。

<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/>

558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138 tel: 06-6605-2071
e-mail: office@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp

所長 佐々木雅幸 副所長 水内俊雄 岡野 浩 富田常雄
ユニット長 1U 佐々木雅幸 2U 嘉名光市 3U 水内俊雄 4U 岡野 浩
<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/staff/>

大阪市立大学 都市研究プラザ ニューズレター 第9号 2010年11月
編集委員会 佐藤由美、橋羽 愛
<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/staff/>